1 キャッシュ・フロー計算書はなぜ、重要なのか？

●会社を評価する基準
●キャッシュ・フロー計算書の意義

CASE 考えてみよう！

佐々木くんは、ある日、新聞を見てびっくりしました。「えっ、あの大手企業が倒産!?」。たしか、利益が出ていたはずなのに……。佐々木くんは不思議に思いました。なぜ、利益が出ているのに倒産するのでしょうか？

黒字でも会社は倒産する

赤字決算が続けば、会社がピンチになるのは当たり前のことです。でも、会社は黒字でも倒産することがあるのです。資金が不足して支払不能になれば倒産です。利益が出ていても支払不能は発生するのです。

たとえば、商品を大量に仕入れたけれど、売れ残ってしまったことを考えてみましょう。売れた部分だけでも、利益が発生していたとします。しかし、仕入代金の支払いは待ってくれません。売れ残った部分の金額も含め、支払いの必要があるのです。そうすると、支払い不能になる危険性があります。

このように黒字倒産は、大量に在庫を抱えたときや、売掛金の回収が遅れたとき、あるいは多大の設備投資をしたときなどに現れます。そうなってくると、損益計算書で会社の利益を見ていただけでは、会社の状況を把握するのは困難ということになります。

そこで登場してきたのが、キャッシュ・フロー計算書（59ページ参照）です。キャッシュ・フロー計算書はキャッシュの増減に着目した計算書類です。

資金の出入りを示す財務諸表

会社の善し悪しを見るときには、利益があるのかどうか、つまり、「儲かっている会社かどうか」が大きなポイントです。それで、かつては会社を評価するときには、「利益」が中心でした。

今でも、利益が一番大きなポイントであることは変わりませんが、じつは、貸借対照表や損益計算書は、比較的簡単に利益を操作できます。

会計処理の方法は単一ではありません。減価償却の償却方法（定率法、定額法）や棚卸資産の評価方法の選択の仕方によって、企業の利益はかなり異なってきます。

その点、資金の動きに着目をしたキャッシュ・フロー計算書は、資金の増減という客観的事実を素直に表現しています。投資家から見れば、信頼のおける財務諸表なのです。

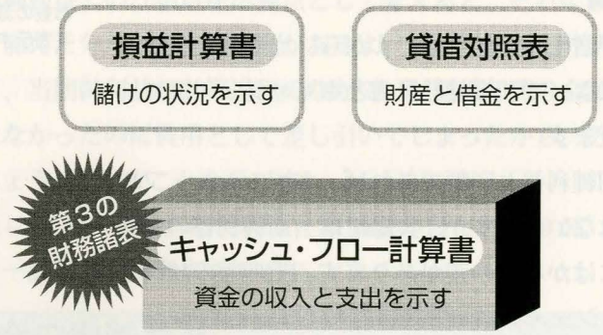
つぶれた企業を見ると、おきまりのように粉飾決算が発見されます。

ある大手企業が買収した会社は2,000億円にものぼる利益を粉飾していたという事件もありました。企業が公表する利益は信頼に足るものといえるでしょうか？

粉飾決算
利益を実際よりも多く見せかけること。上場企業が株価を維持したり、銀行などから融資を引き出したりするために行われる。

また、投資家は、現金を投下していますから、企業がどのくらいの現金を回収できたのかを評価の基準とすることには、大きな意味があります。キャッシュを事業に投下し、その見返りにいくらのキャッシュが得られるかに興味があるからです。

それならば、会社の状況を、資金の出入りを中心に見直そう。こうして登場してきたのがキャッシュ・フロー計算書なのです。



学習ポイント
今までの企業評価の中心は損益計算書の利益。しかし、利益は会計上の操作で粉飾されやすい。それに対して、キャッシュ・フロー計算書は「事実」として粉飾しにくい。